

高等教育の環境に関する研究

土橋信男(北星学園大学)

大学を教育機関として位置づけるときには、その教育的環境の持つ意味はきわめて重要であるといわねばならない。大学における教育の過程の中心は学生の自主的な学習だからである。したがって、大学教育を成功に導く一つのかぎは自主的な学習をひきおこさせるようなさまざまな教育的環境をととのえることにあるといつてもよいであろう。

ところでこのような教育的環境とはいかなるものであろうか？ ペイス(Robert Pace)によれば、それは学科目、教授、書籍、試験、講義、規則、課外活動、施設設備、学生の態度や期待等、大学を構成するあらゆるものにより成り立っているのである⁽¹⁾。これらの多くの要因が組みあわされて大学の環境、雰囲気はつくられる。そして、丁度人間が一人一人異なる個性を持つように、各大学にもこうした要因によってつくられる特性が存在する。こうした仮説にもとづいてペイスは1960年代に大学環境スケール(College and University Scales—以下CUESと称する)を開発した。そしてCUESを構成する項目の因子分析から、大学の特性を表わす5因子、すなわち実用性(Practicality)、学究性(Scholarship)、共同性(Community)、妥当性(Propriety)、意識性(Awareness)がみちびきだされた。以来アメリカの多くの大学においてCUESが用いられ、その教育的環境が測定されてきている。

本研究の目的は、1970年に立教大学において開発された日本版のCUESを用いて、一地方私立大学(北星学園大学)の教育的環境について次の諸点を明らかにすることである。

1. 北星学園大学の教育的環境の特性はどのようなものか。
2. 先行研究として明らかにされた教育的環境(立教大学、関西学院大学)と比較してどのようなちがいがあるのか。
3. 学年や学科により環境のうけとめ方に差があるのか。
4. 入学時(直後)と入学後に環境のうけとめ方は変わるか。

これらの問題を明らかにするため1977年、1978年、および1979年に在学学生800名にCUESを実施した。本研究の内容はその結果についての分析と考察を中心とするものである。

(1) C. Robert Pace, College and University Environment Scales, Technical Manual, ETS, 1967.